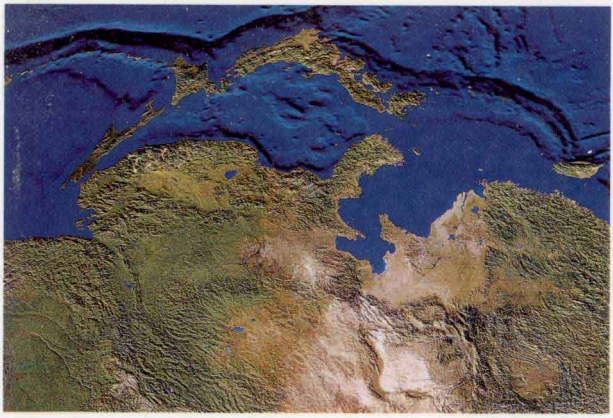
二重言語国家・日本

石川九楊 *Kyuyo Ishikawa*



NHK BOOKS
[859]

日本放送出版協会

Expressing the Japanese Mind in English

日本人の発想から英語の表現へ

江苏工业学院图书馆
藏书章

国際交流基金 編

東京 研 究 社 出版

石川九楊——いしかわ・きゅうよう

● 1945年、福井県生まれ。京都大学法学部卒業。書家。明治大学大学院・東京学芸大学・京都精華大学講師。
●主な著書『書の終焉——近代書史論』(サントリー学芸賞受賞・同朋舎)『書の風景』(筑摩書房)『筆蝕の構造——書くことの現象学』(筑摩書房)『書と文字は面白い』(新潮文庫)『書字ノススメ』(新潮社)『書とはどういう芸術か——筆蝕の美学』(中公新書)『中國書史』(京都大学学術出版会)『書を学ぶ』(ちくま新書)『現代作家100人の字』(新潮文庫)『やさしく極める〝書聖〟王羲之』(新潮社)『逆耳の言——日本とはどういう国か』(TBSブリタニカ)『叢書・書の宇宙』全24冊(編著・二玄社)
●主な作品集『しかし——石川九楊作品集』(思文閣出版)『歎異抄——その20の形象喩』(京都書院)『Kyuyoh ISHIKAWA』(アートランダム77・京都書院)

NHKブックス [859]

二重言語国家・日本

1999年5月30日　第1刷発行
2001年2月10日　第8刷発行

著　者　石川九楊
発行者　安藤龍男
発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41-1　郵便番号 150-8081
電話 03-3780-3317(編集) 03-3780-3339(販売)
http://www.nhk-book.co.jp　振替 00110-1-49701
[印刷] 三秀舎　[製本] 芙蓉紙工 [装幀] 倉田明典

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。
ISBN4-14-001859-3　C1381

家・日本

石川九楊 *Kyuyo Ishikawa*

NHK BOOKS
[859]

日本放送出版協会

©1999 Kyuyo Ishikawa

Printed in Japan
[協力] 青藍社

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はじめに

さよなら遺伝子と電子工学だけを残したままの
人間の世紀末
1999

一九九八年に亡くなった詩人・田村隆一は、その最後の詩集『１９９９』をこう締めくくった。「人間の世紀末」というのは、いささか詩人らしからぬ月次（つきなみ）な表現だが、「遺伝子と電子工学だけを残したままの」の箇所には、人類の理想からはほど遠い、未熟な現代資本主義文明へのにがい思いがこめられている。現在の世界史的一大転換とは、全世界が、この行きすぎた商品市場経済とその文化文明をどのように克服するのかという一大過渡期にさしかかったということであろう。

商品の世界化、大衆の海外旅行や英会話熱、国際通信網（インターネット）による通信とは裏腹に、ここ四半世紀の日本人の潜在的精神状況は自閉、鎖国状態に入ったように思われる。世界大（スケール）の視野での思想はもとより、過去を超える文化や表現が生れてこない。それどころか、ささやかな文化の後継者すら育たなくなったような状況が日本を覆っている。

それが何に起因し、どのように克服するかの名案が即座に見つかるとは思えない。しかし、人間

が言葉する存在であり、また、言葉は文化をつくり上げると同時に再生産する力である以上、日本語とその文化の中に隠れているその原因を探し、その超克法を考えることは、永い歴史的視野の中では、ひとつの有効な方法と言えるのではないだろうか。

「日本とは何か」「日本人とは何か」などと問う思考は、近代以降の日本においてはことのほか強く、明治よりこの方、多くの人々によって、日本人論や日本文化論が書かれている。

たとえば、明治期では、三宅雪嶺（みやけせつれい）の『真善美日本人』『偽悪醜日本人』、芳賀矢一の『国民性十論』、さらに下れば、和辻哲郎の『風土』、ルース・ベネディクトの『菊と刀』、中根千枝『タテ社会の人間関係』、土居健郎『「甘え」の構造』、梅棹忠夫『文明の生態史観』、河合隼雄『中空構造日本の深層』……。南博の『日本人論――明治から今日まで』には五〇〇以上の論が整理、検討されているほどだ。

その中からひとつの例を掲げる。

『万葉集』の美しさ、「さやけさ」といい、『古今集』の「わび」、または世阿弥のいう「幽玄」といい、中世のいう「すき」といい、さらに江戸時代が好むところの「いき」の美しさといい、それを貫いているものは、すべて前にいったようなこころぐみ（きれい、清くけろりとしたもの――筆者註）を、時代時代が、その時その時の表現でもっていい表わしたかと思われるのであります。

すべてこれ、きれいで、さっぱりとし、軽く、柔らかく、流れ動き、清く新しく、常に濁りと

汚れと、重さから脱出せんとするところの、脱出の精神と行動がみとめられるのであります。

（中井正一『美学入門』）

この種のさまざまな日本人論や日本文化論が人口に膾炙（かいしゃ）してきた。

本書は、この五〇〇余点にさらに新たに一点をつけ加えようというわけではない。逆に、これらの日本文化論に終止符を打ち、それらの議論から遠ざかろうとするためのものである。そのために、日本語がどのような言語であるかを明らかにする。人間の思考は言語に拠るしかなく、文化はその母語から生み出され、また再生産される。日本語の構造とその特質が明らかになれば、それによって生み出される文化的な諸現象は自ずから明らかになるものだからである。

日本語がどのようなものか、その母語を用いるところに生れる文化がどのようなものであるかが明らかになれば、さしたる根拠があるとは思われない日本人優秀論、あるいはその逆の日本人劣愚論からも自由になれる。

ところで、なぜ日本人は、「日本人とは」「日本文化とは」と問うのか。おそらくそれは、問う側が、日本人であること、また日本文化に対して、異和をもつからである。異国の地で日本人に出会った時、親近感と同時に、嫌悪感をもつという意識は、この異和感に生じている。日本人であることに異和をもつということは、日本語に対して、日本人は、いくらかしっくりこない部分、奥歯に物が挟まったほどに異和感を抱いているということである。それは、世界大の視野からは、①文字

への異和と、②日本語の構造への異和を感じるということに帰するように思われる。

「コウエンを頼んだ」と言っても声だけでは「講演」なのか「後援」なのかが明らかにならない日本語は、言葉の中央に文字＝書字が位置する書字＝文字中心言語である。ところが、日本語の文字には、西欧アルファベットのような音素文字ではないが、仮名という音節文字つまり一般には表音文字と呼ばれる音写文字が存在する。音写文字を含む日本語においては、中国語のように文字はそのまま言葉であるということにはならず、文字と言葉との間に、いくぶんかのずれ（あそび）をつくる。ここに、東アジア漢字文化圏に属する書字＝文字中心言語であるにもかかわらず、発語の際に、言葉との間の齟齬（そご）と異和が恒常的に再生産されることになる。言葉に対して、「言の葉にすぎぬ」というような齟齬、もっと言えば、俺が言いたいことは、ほんとうは言葉にはなりえないのだという不足感につきまとわれるのである。これが日本語に対する異和の第一の理由である。

第二の理由は、日本語が、語彙的には、もともとは中国語であった漢語と弧島に生れた和語の二重言語であり、構造的には漢語を主とする詞を和語の辞（テニヲハ）が支えるというように、中国語寄りの日本語と、和語寄りの日本語に内部で分裂しているところに生じる異和である。

「雨＝あめ」にまつわる言葉だけでも、「春雨・秋雨・驟雨・冷雨・豪雨・穀雨・梅雨・霖雨……」の中国語に連なる漢語「雨（う）」の系譜と、「はるさめ・こさめ・ひさめ・こぬかあめ……」などの「あめ」のいわゆる和語の系譜がある。一概には言えないが、一般的に言えば「雨」の系譜は、多少遠景にあり、また温感は少し冷たく、輪郭は明瞭である。対する「あめ」の系譜は近景にあり、

温感は暖かいが、輪郭はいくぶんぼやけている。しかも、「わらう」など和語の動詞においては、嗤うも談笑することも微笑することもその語によっては区別せず、言葉の領域の厳密さと漢字＝漢語のような造語力に欠ける。

また、「降雨」とも換言できる「雨が降る」は、「雨」や「降る」などの詞を、「が」などの辞が支えるという文法構造をもっており、詞の多くは漢語であることから、詞たる漢語に辞たる和語が結合し、支えている。

このように日本語は、二重に分裂した言語の統一体＝二重言語であり、そこにすっきりした単一の原理を見つけることは難しい。

ちなみに、ここで言う「二重言語」について補足しておけば、これは近年、文化人類学者や言語学者達が紹介する「ピジン」や「クレオール」とはまったく異なる概念である。ピジンや、ピジンが母語化したクレオールは、もともと、地理上の発見以降の西欧語とアジアやアフリカの言語との衝突の中で生れた変形西欧語を指すもので、これらの概念は、無文字段階での言語間の戦争と植民地化の問題にまで敷衍できる。だが、漢字文化圏における二重言語は、文字に固定された中国語の宇宙（語彙と文体）そのものが、そっくり入り込むことによってこれへの同化と反撥の中から生れた新しい諸言語（日本語・朝鮮語・ベトナム語など）とその構造であって、無文字・音声言語レベルでの雑種性を指すピジンやクレオールなどとは次元も構造もまったく異なっている。おそらく、文字をもった中国語の流入以前の無文字の弧島語（倭語）の段階から存在する前朝鮮語や前中国語と

のピジンやクレオールの問題などは、日本語にとって、ほとんど問題にするに足りないものである。

漢字と平仮名と片仮名という三種類の文字間の異和、また、それに呼応した、漢語と和語の間の異和――日本語の中にひそむこれらの異和が、それを用いる日本人に何かしっくりいかないしこりを再生産し、それが「日本人とは何か」という問いをもたらしている。したがって、日本語の構造が明らかになれば、それは相似的に日本人の意識の構造を明らかにし、世界の中における日本人の位置関係を明らかにするはずである。以下その課題に接近してみたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

はじめに　3

第一章　日本語は特異か――13

（一）　日本語は特異ではない　13

文字は言葉に内在的である　文字と歴史

文字は音韻を変える　文字は文法をつくる

（二）　日本語は特異である　32

第二章　日本語は書字中心言語である――35

（一）　書字中心言語とは何か　35

文字とは書字に他ならない　文字が言葉を生産する

文字の災厄　表意文字と表音文字

(二) 書字中心言語はいかに生れたか 53
「声と文字」という誤謬　声と筆蝕　触覚と痕跡
筆蝕は思考する
(三) 書字中心言語の文化の特質 70
「見る」文化　手の文化　線の文化
音楽　絵画　印鑑
第三章 日本語は二重言語である―― 93
(一) 二重複線言語とは何か 93
日本文化は特異である　日本語は漢字と仮名からなる　漢字
片仮名　平仮名　二重言語の意味　二重言語の生理
(二) 二重複線言語形成史 112
日本とは何か　汎太平洋、汎アジア時代　中国時代　擬似中国時代
日本時代への歩み　天皇とは何か　二重複線言語の浸透
近世江戸時代
(三) 二重複線言語の文化 151

落語　演劇　文化の二重複線性
（四）二重複線言語の美学 161
川の流れのように――宗教なき言語　月かたぶきぬ――国家なき言語
花は散る――歴史なき地理なき言語　日出づる国――政治なき言語
第四章　書字中心・二重言語の現在と未来――――183
（一）二重複線言語の近代・現代 183
近代化は中国化　文字と国家　国語と日本語
（二）二重複線言語の現在 200
近代日本語の再構築　泡沫経済と片仮名　語彙の再構成
語彙制限の撤廃　縦書きの復権　毛筆教育の再構築
出版文化の再構築　日本語教育の再構築　和心・漢魂・洋才の必要
おわりに 236
あとがき 243

第一章　日本語は特異か

（一）　日本語は特異ではない

外国人の移住や労働、また日本国籍の取得が強く制限されている現在までのところ、日本人はおおよそ日本語人に還元されるから、「日本人は特異か」という問いは、「日本語は特異か」という問いに置き変えることができる。

日本語は特異なのか？

日本語も中国語や朝鮮語、あるいは西欧諸語と同様に言語である以上、世界のあらゆる言語と共通項をもち、それらと同じ構造をしており、日本語だけが、他の言語とまったくかけ離れた言語であるはずはない。したがって、とりあえず日本語は特異ではありえないという解答が用意される。

その点においては日本語はなんら特異ではない。だが、日本語が特異に思われるのは、西欧言語学とその忠実な使徒である日本の言語学者が、言語と文字の問題についての考察を誤っているからだ。

文字は言葉に内在的である

どうも文字というものに対して、誤解がある。

「言語と書とは二つの分明な記号体系である。後者の唯一の存在理由は、前者を表記することだ」

というのは、西欧の言語学者・ソシュールの『一般言語学講義』の中の言葉だが、「書＝書字＝文字は言語を表記するものだ」というようなことには、少なくとも日本語においては、なりはしない。

ソシュールの言語論にせよ、チョムスキーの「生成文法論」にせよ、あるいはその影響下にある日本の言語学にせよ、コンピュータソフトの開発には役立っても、その学問がいっこうに人間や社会の現実を解き明かすことにならぬのは、意識と言葉の深みへの考察を欠いているからである。とりあえず、ここで引用したソシュールの言について言っておくならば、ソシュールは、文字を単なる言葉の表記つまり音写にすぎないものとして、貧困なものとしてしかとらえておらず、したがって、言葉自体もまた、ずいぶんと貧困なものとしてしかとらえられてはいない。

我々はほとんど深い自覚もなしに言葉を用いている。だが、それは、慣れっこになっているから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.